



# 教皇様の聲

# 3

# 239号

Libreria Editrice Vaticana, Citta  
del Vaticanoの転載許可済 2000

## 赦しの秘跡は神との出会いの場

1 （御父へ向かう旅路は、大聖年準備の年の間特に黙想すべきこととして提示されていましたが、）その旅路の中で、赦しの秘跡の深い意味が再発見されることにもなります。赦しの秘跡では、聖霊において、キリストを通して罪を赦してくださる方にお会いします。（「紀元2000年の到来」50番参照）

様々な理由から、教会はこの秘跡について急いで真剣に考える必要があります。現代のキリスト教徒は、人間生命の倫理面があいまいになっている社会の中で生きて行かなければなりません。キリスト者が現代社会で生き行動する時の原動力となるのは御父の愛です。その愛という点から見ても赦しの秘跡についてよく考える必要があります。善悪の区別をきちんと判断できない人が大勢います。それは、神を忘れ、心理学的、社会学的見方によってのみ罪を判断しようとするからです。司牧者は信仰の旅路が大きく前進するよう、人々に新しい力を与えなければなりません。そしてそのためには、赦しの秘跡の精神と実践の大切さと値打ちを強調すべきなのです。

2 聖書は、「悔い改め」とは改心するための生涯をかけた道であると教えます。悔い改めは、神の恵みによって良心を新たにすることが前提となります。特に新約聖書では、神の国を知った人々がまず初めに求められるのは改心することでした。「悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ1・15、マタイ4・17参照）イエスはこの言葉で公生活を始められ、時が満ち、神の国が近いことをお知らせになりました。「悔い改めよ」という主の御言葉は、考え方や振る舞い方を変えるようにという呼びかけです。

### 改心と呼びかけるキリストの教え

3 この改心への招きは、聖霊降臨後、使徒たちが行なった説教の重要な結論となっており、それによって、教えの内容がよく分かります。使徒たちは余すことなくキリストの教えを述べ伝えます。使徒たちが語ったことは、抽象的な「神の国」

ではなく、預言されていた神のご計画をイエスが実現なさったことでした。イエス・キリストに起こったこと、亡くなって復活し、今は御父の栄光のうちにおられることを伝えた後、使徒たちは急いで「改心」するよう人々に呼びかけます。そして、改心は罪の赦しにも関わっています。以上のことは、ソロモンの回廊でのペトロの説教にもはっきりと示されています。「神はすべての預言者の口を通して予告しておられたメシアの苦しみを、このようにして実現なさったのです。だから、自分の罪が消し去られるように、悔い改めて立ち帰りなさい。」（使徒言行録3・18～19）

旧約聖書では、神はご自分の民と契約をかわし、罪の赦しを約束されました。（エレミヤ31・31～34参照）神は人々の心に律法を刻まれるのです。改心は神との最終的な契約を結ぶために必要であると同時に、福音の教えを受け入れ、歴史的、終末論的神の国に入るために必要な態度でもあります。

4 神の御言葉が示す根本的な価値観が、人間には理解できない方法ですが、赦しの秘跡によって目に見える形で表されます。この秘跡によって人間は再び救いの契約にあずかり、三位一体の生命に開かれます。恩恵と対話し、聖霊の愛と賜物を受ける生命です。

赦しの秘跡の式次第をじっくり読むと、大聖年にこの秘跡の本質的な部分を深く理解することができるといえるでしょう。教会の成長は、赦しの秘跡を再確認できるかどうかにかかっています。赦しの秘跡は単なる典礼上の行為であるだけでなく、キリストの生涯を通して見られる償いの態度につながって行きます。赦しの秘跡は、「聖なる御父のそばに引き寄せ、罪によってかき乱され平安を失っていた者を、心の奥底で自分自身と和解させ、本来の姿を取り戻させます。救いの喜びを再び味わうことができるようにしてくれるのです。けれども今、この喜びを知っている人はほとんどいません。」（「和解と悔悛」3の31）

5 赦しの秘跡の教理面については、使徒的勧告「和解と悔悛」（28～34番参照）、カトリック教会のカテキズム（1420～1484参照）、その他の

教会の文書を参考にしてください。ここで司牧者の重要な責任についても一度考えたいと思います。司牧者は、神の民に赦しの秘跡の素晴らしさを教え込み、人々がその大切さを理解できるよう努力しなければなりません。司牧者の努力によって、人々は赦しのメッセージと改心への道、実際に赦しの秘跡を受けることの重要性を知ることとなり、現代の人々の心は深く動かされることでしょう。

### 改心は良い行いに表れる

特に思い出していただきたいことがあります。司牧者自身は良い聴罪師になるために、まず自分が良い告解をする人でなければなりません。ご存じのように、司祭は赦す権限を託されています。司祭が与える赦しは「御父の介入を明らかに示すしるしです。」（「和解と悔悛」3の31）それによって告白する人は霊的な死からの復活を果たします。福音に

一致した謙遜さと真っ直ぐな心を持って、司祭が司牧者としての任務を果たすためには、自分自身が成長し新しくなることを心に留めなければなりません。これがなければ、自分と人々の良心にどうしても必要な人間的霊的素質を欠くことになるでしょう。

司牧者と共に全教会の共同体が、赦しの秘跡の司牧的刷新に取り組まなければなりません。これは、この秘跡そのものの教会の本質から見ても要求されている事柄です。教会は悔い改める者や罪を赦された者を暖かく迎え入れるところです。さらに、御父の元に帰れるよう罪人に手を差し伸べ、道を整えるところです。和解した教会、そして和解途上の教会こそ、罪人が見失っていた道を再び見出し、兄弟たちの助けを受けるところなのです。キリスト教の共同体を通して、最終的には愛への道が再び開かれることとなります。それは、善い行いをすることによって再び赦しを得て、悪を償い、御父の慈しみあふれる抱擁を受ける道のことなのです。（1999・9・15）

## 創造に現われる三位一体の秘義

〔旧約聖書では三位一体についてはっきりとは啓示されていないものの、創造主、御言葉、聖霊である神についてのしるしが見られる。〕（教皇様は三位一体についてのカテケージスをお始めになりました。以下は2回目のお話の内容です。）

〔1月26日水曜日の一般謁見で教皇様は、創造に表れる三位一体の栄光について話された。「こうして自然は福音となり、神について語るものとなります。『造られたものの偉大さと美しさから推し量り、それらを造った方を認めるはずなのだから。』（知恵の書13・5）」この栄光に応えて人間は「驚くべきこの事柄を黙想し歌い再発見」しなければならない。〕

**1** 「主のすべての業はなんと見事なものであろうか。目に映る小さな火花に至るまで。（…）主は不完全なものを何一つ造られなかった。（…）だれが主の栄光を見て飽き足りたといえようか。いかに多くを語っても、決して語り尽くせない。『主はすべてだ。』このひと言に尽きる。主の栄光をたたえる力をどこに見いだせよう。主は御自分のすべての御業にまさって偉大だから。」（シラ書42・22、24～25；43・27～28）驚きに満ちた言葉で、聖書の賢人シラは創造の輝きを観想し神を称えて歌いました。聖書は被造物が創造主の力強い言葉で呼び出されて、沈黙の無から姿を現す創世の書

に始まりますが、シラのこの言葉は聖書の流れに見られる黙想と観想の小さな一節に過ぎません。

### 神の威厳は天国で称えられる

「神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった。」（創世紀1・3）創造の初めの記述で、神の御言葉がすでに活動しています。ヨハネは御言葉について記しています。「初めに言があった。（…）言は神であった。（…）万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。」（ヨハネ1・1～3）パウロはコロサイ人への手紙の中で賛歌によって強調します。「天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、王座も主権も、支配も権威も、万物は御子において造られたからです。つまり、万物は御子によって、御子のために造られました。御子はすべてのものよりも先におられ、すべてのものは御子によって支えられています。」（コロサイ1・16～17）しかし創造の初めの瞬間に聖霊についても暗示されています。「神の霊が水の面を動いていた。」（創世紀1・2）キリスト教の伝承に基づいて言えることは、三位一体の栄光が創造の過程で輝いているということです。

**2** 啓示の光によってわかることは、創造はまず、「移り変わりも、影もない光の源である御父に」（ヤコブ1・17参照）帰せられていることです。詩篇作者が歌うように、神は全地平線にまばゆく輝き

ます。「主よ、わたしたちの主よ、あなたの御名は、いかに力強く、全地に満ちていることでしょう。天に輝くあなたの威光をたたえます。」(詩篇8・2) 神によって「世界は固く据えられ、決して揺らぐことがない。」(詩篇96・10)ものになりました。声をあげる渾沌たる水に象徴される無に神が面をお向けになると、創造主が立ち上がり、世界を固く据え、揺るぎなきものとなさいます。「主よ、潮はあげる、潮は声をあげる。潮は打ち寄せる響きをあげる。大水のとどろく声よりも力強く、海に砕け散る波。さらに力強く、高くいます主。」(詩篇93・3~4)

3 聖書の中でしばしば創造も突然現れ行動を起こす神の御言葉に結びつけられています。そして御言葉は突然現われ動き出します。「御言葉によって天は造られ、主の口の息吹によって天の万象は造られた。(…)主が仰せになると、そのように成り、主が命じられると、そのように立つ。(…)主は仰せを地に遣わされる。御言葉は速やかに走る。」(詩篇33・6、9; 147・15) 旧約聖書の知恵文学では、擬人化された知恵が世界を生み出し、神の計画を実現します。(箴言8・22~31参照) ヨハネとパウロは神の御言葉や知恵の中に、キリストの行いについての預言を見たと言われています。「万物はこの主によって存在し、わたしたちもこの主によって存在しているのです。」(1コリント8・6) というのも神は「御子によって世界を創造なさった」(ヘブライ1・2) からです。

4 聖書は他の箇所では創造の御業における神の霊の働きを強調しています。「あなたは御自分の息を送って彼らを創造し、地の面を新たにされる。」(詩篇104・30) 同じ霊が象徴的に神の息吹として表されます。神の霊は人間に生命と良心を与え、(創世記2・7参照) 復活の生命をもたらします。預言者エゼキエルが呼び起こしているように、神の霊が働いて乾いた骨に生命が吹き込まれます。(創世記37・1~14参照) イスラエルの出エジプトの時、この同じ息吹が海の水をせき止めました。(出エジプト15・8、10参照) 同じ神の霊は再び人類を生

み出します。ある夜、イエスがニコデモとの会話の中で仰せになったことからわかります。「はっきり言うておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。」(ヨハネ3・5~6)

### 被造物を通して目に見えない神を知る

5 ですから、創造における三位一体の栄光を見守りながら、この驚くべきことを黙想し、歌い再発見しなければならないのです。現代社会の人々は無関心になっていますが、それは「驚くべきことがないからではなく驚く態度が不足しているから」(G.K. チェスタトン) です。信じる人々にとって創造の御業を観想するとはメッセージを聞くことであり、逆説的な沈黙に耳を傾けることです。「太陽の詩編」が歌う通りです。「天の神の栄光を物語り、大空は御手の業を示す。昼は昼に語り伝え、夜は夜に知識を送る。話すことも、語ることもなく、声は聞こえなくても、その響きは全地に、その言葉は世界の果てに向かう。」(詩編19・1~5)

こうして、自然は神について告げ知らせる福音となります。「造られたものの偉大さと美しさから推し量り、それを造った方を認めるはずなのだから。」(知恵の書13・5) パウロは教えてくれます。「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。」(ローマ1・20) けれども、観想し、知識を得る能力、被造物の中に超自然の存在を発見する力は、この世との密接な関わり、造られた時からずっと持続しているこの地上との結びつきをも再発見させてくれます。(創世記2・7参照) これこそ旧約聖書がヘブライ人の聖なるヨベルの年のために望んだことです。その年、畑は休閑し人々は自然に生えたものを食物としました。(レビ25・11~12参照) 自然は、乱されたり汚されたりすることがなければ、再び人類の兄弟となるでしょう。(2000.1.26)

## 信仰と理性は不可欠な関わりを持つ

[9月26日日曜日、お告げの祈りを唱える前に、教皇様は回勅「信仰と理性」について触れ、信仰を増すために必要な理性の役割を強調された。]

兄弟姉妹の皆さん、

1 回勅「信仰と理性」について深く考えましたが、今日は信仰の旅路における理性の役割について見て行きたいと思えます。理性はいろいろな

方法で信仰と関わっています。理性は信仰への同意が熟したときにはすでに存在しています。というのも、「啓示する神の権威」(第一バチカン公会議「デイ・フィリウス(神の子)」3008)に基づいているものの、信仰はすこぶる理性的に成長し、神が救いの歴史の中で示された「しるし」を見分けるからです。(回勅「信仰と理性」12番参照)

言うまでもなく、実験科学で言う「証明」のことを指しているのではありません。神の「しるし」は、「個人的な対話の中に」（同上13番）見られます。神の「しるし」は理性に訴えるだけでなく、深い存在的関わりをも要求します。その時、恩恵の内的助けも伴って、神の「しるし」ははっきりした信号となって現われます。いわば「霊の道標」です。それは神の現存を指し示し、神に全く信頼し自己を捧げるよう促します。

2 理性は、その「基本的な」レベルを越えて働き続けます。成熟した信仰は知性を求め、聖アンセルムスが言うように、「理性が愛するものを求めるために」知性を用いるのです。こうして、信仰は理性にかなったものとなるだけでなく「強い根拠」を持つものとなります。ここに神学が実現しなければならない仕事があります。それは、啓示の資料を集めてそれを体系的に熟考すること、様々な角度でそのデータを丹念に調べること、真理の様々な面の中に調和を見い出すこと、そして最後に、常に

文化と歴史が提起する新たな挑戦に応えることで

す。知性と信仰の不可欠な関係が成立します。このようにして、「信仰は理性を、理性は信仰を含んでいる」（同上17番）と言っても間違いではないでしょう。私たちの能力を越える秘義を知りたいければ、信じなければならぬことがあります。理解するために信じるといことです。他方、信仰を理性的なものにし、より成熟させるためには、考え理解しなければなりません。つまり、信じるために理解することも大切だということです。

3 今日特別に、神学者の方々をおとめマリアにお委ねしたいと思います。神学者の研究は大切な仕事であり、大人の信仰に見合う指導もしなくてはなりません。「上智の座」である聖マリア、神学に携わる人々をお助けください。神学者の皆さんが「職務」を実行するにあたって、知的にも霊的にもふさわしく献身し、聖霊に対しても絶対的に従順でいられるようお導きください。（1999・9・26）

## 家庭が恵みを受ける時

大聖年、崩壊した家庭に一致がもたらされる時

始まったばかりの大聖年、世界中の家族に恵みと救いがもたらされるよう祈りましょう。家庭が御言葉の受肉の光に照らされ、人々が神の呼びかけをより良く理解し、その呼びかけに添って生きることができるよう。神のご計画は、人間が神の愛を映し出す者になることです。

大聖年に家庭はチャンスを与えられ、改心して互いに赦し合うようになるでしょう。大聖年はそのためにふさわしい時です。家庭で愛情が強められ、崩壊した家庭に再び一致がもたらされます。教会や社会の中でキリスト者の家庭は大切な使命を持っています。このことを更に深く自覚できますように。今日、家庭はより一層の助けを必要としています。貧しく心休まることのない家庭は特にそうです。また、新しい生命を喜んで迎えられるよう家庭を励まさなければなりません。この世に産まれる子供は例外なく賜物であり希望なのですから。

現代、「家庭は、どんな共同体よりも、社会と文化の急激な変化のあおりを受けています。」信仰の

ある者は次のことを力強く再確認しなければなりません。「結婚と家庭が人間に与えられた価値の中で最も大切なものの一つである」ということをです。教会は飽くことなく「結婚と家庭の未来を心配している人々に奉仕」します。（「家庭」1番）

大聖年は家庭にとっても改心の時

大聖年であるこの二千年に、それぞれの家庭が勇気をもって扉を開け、人類の救い主であるキリストを受け入れることができますように。キリストにこそ人間のあらゆる期待を超える新しさがあります。地上の物事の真実を判断する基準、また人間の生活を更に人間らしくする努力を評価するために真の基準となるものです。（「受肉の秘義」1番参照）

これらのことを念頭において、聖霊に満たされたナザレの家へ入っていきましょう。そして聖家族にお願いするのは、世界中の家庭をお守りください。家庭に祝福が与えられ「豊かな人間を育てる学校（「現代世界憲章」52）となりますように。

（1999・12・29）

「教皇様の聲」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙

■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円（税込）

詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人 ■精道教育促進協会 〒659-0093兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-34-5920

FAX. 0797-34-4920 振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会

\* 電話受付時間は月・木・金曜日午前10：00～12：00、水曜日午前10：00～午後5：00となっています。

# 赦しの秘跡

「カトリック教会のカテキズム」(試訳)より

## II なぜ洗礼を受けた後で

和解の秘跡が必要なのか

1425 「あなたがたは、主イエス・キリストの名と私たちの神の霊によって洗われ、聖なる者とされ、義とされています。」(1コリント6・11)。私たちがキリスト教入信の秘跡において与えられる神の賜物の偉大さを悟れば、罪が「キリストを着た」(ガラティア3・27)者には、どれほどあるまじきものであるかを理解するであろう。しかし、使徒聖ヨハネはこう言っている：「自分に罪がないと言うなら、自らを欺いており、真理は私たちの内にはありません」(1ヨハネ1・8)と。また、主ご自身私たちに「我らの罪を赦し給え」と祈るようにお教えになり(ルカ11・4)、私たちが互いに罪を赦し合わねば神は私たちの罪をお赦しにならないとおっしゃった。

1426 私たちはキリストに改心し、洗礼によって新たに生まれ、聖霊の賜物をいただき、さらにキリストの御体と御血を拝領することによって、ちょうどキリストの花嫁である教会自身が「主のみ前に聖なる汚れのない」(エフェソ5・27)ものであるように、「聖なる者、汚れのない者」(エフェソ1・4)になった。しかしながら、キリスト教入信で新しい生命を受けてからも、人は人間性の弱さと脆さも、また伝統的に欲情と呼ばれる罪への傾きも免除されない。それらの弱さは、信者にとって試練となり、神の恩恵によって助けられながらそれと戦うために、受洗者の中に残り続けるのである(D.S.1515参照)。この戦いは、聖性と永遠の命に向けた戦いであって、主は絶えず私たちをこの目標に呼んでおられる(D.S.1545：教会憲章40参照)。

## VII 告白者の行為

### 痛悔

1451 告白する者のまず第一の行為が痛悔である。痛悔とは、「魂の悲しみであり、将来再び罪を犯さないという決心をもって、犯した罪をいみ嫌うことである。」(トリエント公会議：D.S.1676)。

1452 痛悔が、すべてにまさって愛する神への愛から生まれるとき、それは「完全な痛悔(愛徳による痛悔)」と呼ばれる。かかる痛悔は、小罪を赦す。また、大罪の場合も、もし出来る限り早く赦しの秘跡にあずかる強い決心があれば、その罪の赦しが得られる(トリエント公会議：D.S.1677参照)。

1453 「不完全」と呼ばれる痛悔もまた、神の賜物で

あり、聖霊の働きである。それは、罪のみにくさや、地獄やその他の罪人が受けるべき罰を思いめぐらすことによって、生まれる。そのような心の動きは、恩恵の助けのもとに、赦しの秘跡で罪が赦されるまで発展する可能性がある。しかし、不完全な痛悔は、それだけでは、大罪の赦しを得られない。ただ、赦しの秘跡によって罪の赦しを受けるために霊魂を準備するのである(トリエント公会議：D.S.1678,1705参照)。

1454 赦しの秘跡を受ける前に、神の光のもとで良心の糾明をして準備する必要がある。この究明のための最適の参考書は、福音書と使徒たちの書簡にある道徳についての部分である。すなわち、山上の説教と使徒たちの教えである(ローマ12-15；1コリント12-13；ガタティア5；エフェソ4-6参照)。

### 罪の告白

1455 単に人間的な見地からでさえ、罪を告白するということは、私たちを解放し、隣人と仲直りすることを簡単にしてくれる。告白において、人は自分が悪いと感じる犯した罪と直面する。その責任を取り、そのことによって自分を開いて再び神と教会共同体と仲直りし、新しい生活を可能にする。

1456 司祭に向かって行う罪の告白は、赦しの秘跡の本質的部分である。「告白する人は良心を十分に糾明した後、すべての大罪を告白の時に打ち明けなければならない。たとえきわめて秘密なものであり、神の十戒の最後の二つに反するものであっても(出エジプト20・17；マテオ5・28)、全部を一つ一つ打ち明けなければならない。なぜなら、この種の罪は、明らかに公然と犯す罪よりもずっと大きく霊魂を傷つけるからである。」(トリエント公会議：D.S.1680)。

キリスト信者は思い出したすべての罪を告白しようと努めるとき、自分がすべての罪を赦す憐れみ深い神のみ前にいることを疑ってはならない。もし、これと反対に、故意に大罪を告白しないときには、司祭を通じて与えられる神の赦しは与えられない「もし、病人がはずかしがって自分の傷を医者に見せなければ、医者には自分が知らない傷をなおすことはできない。」(トリエント公会議：D.S.1680)。

1457 教会の掟によれば、「すべての信者は分別の年齢に至った後は、重大な罪を少なくとも1年に1回忠実に告白する義務を有する。」(『新教会法典』989。またD.S.1683;1708参照)。「重大な罪を自覚するものは、秘跡的告白を行わない限りミサを挙行し、又は主のからだを拝領してはならない。ただし、重大な理由があり、かつ告白する機会を欠くときはこの限りではない。その場合、できるだけ速やかに告白する決心を含む完全な痛悔を起こす義務を有することを忘れてはならない。」(『新教会法典』916。またトリエント公会議：D.S.1674；『東方教会法典』711参照)。子供は、初聖体をする前に、赦しの秘跡を受

けなければならない(『新教会法典』914参照)。

1458 厳密には義務ではないが、教会は小罪を告白することを熱心に薦めている(トリエント公会議:DS1680;『新教会法典』988参照)。実際に、小罪を定期的に告白すれば、人は種々の助けを受け、良心を形成し、悪い傾向に対して戦い、キリストによって治され、霊的生活に進歩する。そして、もししばしばこの秘跡を受ければ、この御父の憐みの賜物であるこの秘跡によって、信者は自分もまた憐み深い者となるように助けられる(ルカ6・36参照)。

自分の罪を告白し非難する者は、今や神とともに働くのだ。神はあなたの罪を非難される。あなたもまた非難するとき、あなたは神と結ばれるのだ。人間であることと罪人であることは、言ってみれば二つの異なる現実である。たとえば、あなたが人間として聞くなら、そのとき神が働かれる。あなたが罪人として聞くなら、そのときは人間自身が働く。あなたは自ら行ったことを捨てるがよい、神はご自分のわざをあなたに与えてくださるだろう。・・・あなたが自ら行ったことを不快に思うときから、あなたは自らの悪しき行いを非難し、かくしてあなたの善い行いが始まるのだ(聖アウグスティヌス『ヨハネによる福音書講解説教』12,13)。

#### 償い

1459 罪は多くの場合隣人に害を与える。それゆえ、与えた害を償う(たとえば、盗んだものの返還、中傷された名誉の回復、傷の賠償)ためにできるだけのことをしなければならない。それは単なる正義の要求である。しかし、罪はさらに罪人自身ばかりでなく、神ならびに隣人との関係をも傷つけ弱める。赦しの秘跡は罪を赦すが、罪が引き起こしたすべての無秩序を修復するわけではない(トリエント公会議:DS.1712参照)。罪人は、罪から解放された後も、霊的健康を完全に回復しなければならない。だから、罪の何らかの償いをせねばならないのである。つまり、適当な方法で「弁償する」、言い換えれば「罪滅ぼし」をせねばならないのである。この弁償を「償い」と呼ぶ。

1460 償いを命じる司祭は、告白者の個人的状況を考慮に入れ、その人の善を求めなければならない。可能な限り、犯された罪の重さと性質に対応する償いを課すように努めるべきである。その償いは、祈りや、何らかの捧げ物、または慈善の行為、隣人への奉仕、わざと自分に何かを禁じること、犠牲、とくに私たちが運ばねばならない十字架を忍耐強く忍ぶことなどが考えられる。そのような償いは、一度で永久に私たちの罪を滅ぼしたキリスト(ローマ3・25:1ヨハネ2・1-2参照)と私達を同化することを助ける。「私たちがキリストと共に苦しむ」(ローマ8・17。またトリエント公会議:DS.1690参照)ならば、復活したキリストと共に贖いの業に協力することもできる。

しかし、われわれの罪のために果たす償いは、キリス

ト・イエスによるものであるから、われわれのものでないということではできない。なぜなら、われわれ自身では何もできないが、「われわれを強めてくださる方」の協力によって、「われわれはすべてができる」(フィリッピ4・13)からである。われわれ自身は何も誇るものをもたないが、われわれの栄光はキリストの中にある。・・・そのキリストの中に、われわれは「悔い改めにふさわしい実を結ぶ」(ルカ3・8)のであるが、それはキリストの力から出たものであり、キリストによって父に捧げられ、キリストを通して父に受け入れられるのである(トリエント公会議:DS1691)。

#### IX 赦しの秘跡の効果

1468 「告解は神の恩恵の中にわれわれを立ち返らせ、親密な友情によって神と一致させる力をもっている。」(ローマ公教要理,2,5,18)。この秘跡の目的と効果は神との和解である。痛悔と信心をもってこの秘跡にあずかる人は、「大きな良心の平安と静けさ、深い霊的喜びが与えられる。」(トリエント公会議:DS.1674)。事実、神との和解の秘跡によって、真の「霊的復活」が起こり、神の子の命の品位と善が回復されるが、それらの中でもっとも有り難いことは神との友情の回復である(ルカ15・32)。

1469 この秘跡によって、告白者は教会と和解する。というのは、罪は兄弟的交わりを傷つけたり破壊させたりするからである。赦しの秘跡は、この傷つけられ破壊された兄弟的交わりを修復もしくは回復する。この意味において、赦しの秘跡は単に教会の交わりに戻る者だけを癒すのではなく、成員の一人の罪によって苦しめられた教会(1コリント12・26参照)をも治療する。罪人は、再び諸聖徒の交わりに受け入れられて、この世にまだ旅を続けるキリストの神秘体の生きた肢体、そしてすでに天国の光栄に在る聖人たちから霊的な助けを受けて強められるのである(教会憲章,48-50参照)。

しかし、神とのそのような和解によって、罪によって生じた他の種類の断絶をも修復されるということを言い加える必要がある。すなわち、まず告白者は自己の最も深い心の底において自分自身と和解し、自分の真実の姿を回復する。次に、何らかの形で侮辱を加え傷つけた兄弟と和解する。その他に教会、そして全被造界とも和解するのである(ヨハネ・パウロ2世使徒的勸告“Reconciliatio et poenitentia”「和解と悔悛」1984.12.2.,31)。

1470 この秘跡において、神の憐み深い裁きに信頼する告白者は、ある意味で世の終わりに受けるべき裁きを前もって受けることになる。というのは、この秘跡は、この世で命か死かの選択を迫られ、大罪によって失った天の国に入るために唯一の可能な道である改心(1コリント5・11;ガラテヤ5・19-21;黙示録22・15参照)を選ぶときだからである。罪を犯した者は、痛悔と信仰によってキリストに改心し、「裁かれることはなく」(ヨハネ5・24)死から命へと移る。